

# 高齢難聴者の補聴器適応を左右する要因とその見極め方法

— 補聴器を購入する前に検討するポイント —

吉川 雅博

## 1. はじめに

だれでも補聴器をできることなら一生使いたくない器械であると思っているにちがいない。外耳道を常にふさがれ異物感があり、不自然な音しか聞こえてこない。うるさいし、はっきり聞こえるわけではない。とても高額である。さらに、メガネとちがって簡単に使いこなせない。だからといって、補聴器が役に立たないわけではない。場合によってはなくてはならない体の一部にもなり得るのである。

たとえば、高齢者の聞こえの相談において、次のようなやりとりをすることがある。

「今回の聴力検査結果と実際にこうして話をしているときの通じ方を総合的に判断しますと、〇〇さんは現在補聴器を使われていないようですが、補聴器を使ったほうがよさそうですね。」

「そうですか。実は家に帰れば補聴器はあるんです。何年前に買ってもらったのか忘れてましたが、どこかにしまっています。」

この例のように高齢者の場合、補聴器はすでに購入しているが現在は使っていないという人が多い。筆者はこの主な原因として以下の2点を考えている。

原因1: 補聴器適応が十分に検討されていないため、補聴器装用の必要性の低い人に補聴器を購入させているのではないか。

原因2: 補聴器装用開始後、十分な装用指導や再調整がなされていないため、補聴器を使いこなせる状態に到達していないのではないか。

ここで「補聴器適応」とは、補聴器を装用すると本人の聞こえの状態ならびに本人の生活状況（コミュニケーション）の改善が、高い確率で見込めるかどうかをいう。す

なわち「補聴器の適応が認められる」とは、今後補聴器を使いこなすことによって日常生活が改善していくと予想されることである。

最近のフィッティング技術の進歩により、現在の補聴器は各自の聞こえの特性に合わせられるようになってきているといふものの、聴力検査などをして最も適当と考えられる補聴器を選択し装用したとしても即本人が満足いくような聞こえは保証できない。この事実は補聴器ユーザーには認識されていないものの、ディーラーをはじめ補聴器を扱う専門家にとっては常識である。装用開始後の指導の重要さは昔から指摘されている。しかし、実際には依然として、時間をかけユーザーが納得するまで装用指導されていないことが相談者の話からうかがえる。原因2の解決方法は時間をかけた装用指導の実践あるのみである。

原因1は購入以前の問題である。補聴器販売店の広告やパンフレットなどに「聞こえのチェックリスト」がよく紹介されるようになってきた。これは補聴器の装用を考え始めたほうがよい軽度難聴かどうかを自己診断するためのものである。具体例として表1にシーメンス補聴器の聞こえの自己評価表を示す。これは聞こえの改善対策の必要度を点数化しており、30点前後であれば補聴器を試す必要がある。40点以上なら補聴器を装用する必要がある、という目安を示している。補聴器の適合を考えると、一般的にはこれで十分と考えられているが、筆者はこれでは不十分であると考ええる。

最近ではカナル型補聴器のように各自の外耳道に合わせて補聴器の外形を作ってしまうタイプが増えており、購入することが前提でないで試聴もできない場合が多くなっている。したがって、試聴せずにある程度の適応を予測したり、試聴が簡単な箱型や耳掛型で試してみることも

重要である。また、幼児は言語発達のことを最優先に考えるが、高齢者は日常生活のことを最優先に考える必要がある。補聴器適応に関する考え方は両者で異なって当

然であり、その結果高齢者の場合補聴器は聴力低下を補う唯一の手段とはならない。

表1 聞こえの自己評価表（シーメンス補聴器）

次の①～⑩のことがらが、自分に当てはまるかどうか教えてください。「そうだ」「そうかもしれない」「そんなことはない」の欄のどれかに○をつけてください。

	そうだ	そうかもしれない	そんなことはない
① 二人以上の方が同時に話し始めるとよく聞き取れなくなる		○	
② 自動車の中での話が、何を言っているのかよく聞き取れない		○	
③ このごろ、周囲の人がモグモグした声でハッキリ話をしていないように感じる		○	
④ 家族や知人などが、補聴器を着けてみたらと考えているようだ			○
⑤ 騒音の多い職場やうるさい大きな音のする環境にいる（いたことがある）			○
⑥ 相手にもう一度繰り返し言ってほしいと頼んだり、そうでなければ推測して判断する		○	
⑦ 話し相手の顔を見ていると話しがよくわかる		○	
⑧ テレビの映画や劇の中の会話がよく聞き取れない		○	
⑨ 見知らぬ相手からの電話がよく聞き取れない			○
⑩ 集会、会議、授業などの場での話の内容がわからなくて困る		○	○
①～⑩までの○の数			
上の数字にかけてください	×5	×3	×1
計		21	3
総点	24		

◎聞こえの改善対策の必要度

10 20 30 40 50

問題なし 相談必要 対策必要

自分で採点して15点以下なら補聴器の必要はない、30点前後であれば補聴器を試す必要がある、40点以上なら補聴器を装用する必要がある、とのめやすになります。

監修：筑波技術短期大学教授・医学博士 大沼直紀先生



筆者は高齢者が補聴器を有効に活用するためには、原因2ばかりでなく購入以前のことである原因1も同様に重要な解決すべき点であり、かつ「聞こえのチェックリスト」(聞こえの状態)だけでは補聴器適応について誤解を与える可能性が大きく、この現状を変える必要性を強く感じる。そこで、今回補聴器を購入する前に検討するポイントということで、高齢難聴者の補聴器適応を左右する要因とその見極め方法について、新しい観点も加え論ずる。

## 2. 高齢難聴者の特徴

補聴器適応を考えると、幼児の場合なら、聴力障害が言語発達を阻害するという理由で補聴器をしてもうるさくない聴力程度ならば、ほぼ例外なく補聴器の適応があると筆者も考える。一方、高齢者の場合、言語発達については考慮する必要がなく、長年少しずつ聞こえが悪くなったため、不便ながらも何とかやってきたという実績がある。

現在の補聴器適応に関する一般的な考えを以下に紹介する。

「補聴器を必要とする難聴の程度は、一般的には両耳とも平均聴力レベルが45dB以上の難聴の場合である。もちろん、難聴者によって生活環境は異なり、会話を理解する必要度も異なるので、難聴のため会話に不自由を感じる人は補聴器を試みるべきである。」<sup>1)</sup>

高齢者の聴力の実態調査<sup>2) 3) 4)</sup>によると、80歳台では平均聴力が45dB程度であり、上記の引用にしたがえばほとんど無条件に補聴器適応とみなされてしまう。たとえば、表1で評価してみれば40点以上は必至だろう。本人の生活環境を十分に確認することもなく、聴力レベルの結果のみから補聴器が高齢者に勧められ、お医者さんが言うのだからとか、お店ではよく聞こえたからといった理由ですぐに購入してしまうことが多いのである。

先の引用は45dBよりもっと軽度の聴力程度でも場合によっては補聴器が必要となる人がいるということを示唆しているもので、逆にもっと重度の70dB程度でも場合によっては補聴器を装用する必要がないという事実を、筆者は何度も経験しているにもかかわらず指摘されることは少ない。

「声は聞こえるけれども、何を言っているのか分からない。」という典型的な症状を呈する老人性難聴では、「聞く音を増幅して強くし耳に聞かす器械にすぎない」<sup>5)</sup>補聴器を装用しても根本的な解決にはつながらない。中村<sup>3)</sup>は補聴器適応を左右する最も重要な要因として、高齢者と限定していないがコミュニケーション障害の自覚

と補聴器装用によって障害を軽減しようとする意欲を挙げている。

筆者は、老人性難聴を主因とするコミュニケーション障害による日常生活の支障を軽減するために、補聴器はとても有効ではあるがそればかりでなく家族の障害に対する理解や他の福祉機器も有効であると考えている。たとえば、玄関のチャイムが聞こえないため、来客の存在がわからないという訴えをよく聞く。この場合、チャイムのボタンを押すことを赤いランプの回転などにより室内でわかるようにするほうが補聴器を装用するよりも確実である。

## 3. 補聴器適応を左右する要因

2では高齢難聴者の場合、補聴器適応を左右する要因が聴力程度だけではなく日常の生活環境などの要因について考慮する必要があることを示唆した。ここでは、要因を本人側と他人側の大きく2つに分け、その中でそれぞれの要因について詳細に論じることとする。

### 1) 本人側の要因

① 聴力低下に起因するコミュニケーション障害の自覚  
老人性難聴の特徴として、徐々に聴力が低下してくるためそれを最初に気づくのは他人である。たとえば、「呼んでも気づかない」、「聞き誤りが多くなった」などは、積極的に本人にフィードバックしないことが多い。コミュニケーション障害は自覚されにくいのである。

一方、聞こえないことを気にし過ぎている場合もある。聞き誤りは健聴者でもみられるものであり、年を取れば当たり前と開き直って考えている人は少ない。多くの高齢難聴者は他人の指摘を非常に気にしている。聴力の程度から判断してそれほど気にすることはないはずという場合もある。したがって、自覚と聴力レベルを合わせて考え、自覚が妥当かどうか判断する必要がある。コミュニケーション障害の自覚はそれ自体にあいまいさを含むため補聴器適合を大きく左右する要因とは考えない。

なお、テレビの音量については最近数字で示されるようになって、自覚され易くなったといえる。ただこの数字はどのテレビでも同じ大きさを表すものではないので、比較するときは注意が必要である。

② 聞こえないことでどの程度困っているか(困り度)とそれを改善しようとする意欲

聞こえにくくなってきたという自覚はあっても、ほとんど気にしていない、困っていないという人がいる。



一方、聞こえにくくて困ることばかりで、この現状を打破するために何かよい方法はないかと日々悩んでいる人もいます。このように自覚と困り度はイコールではないので別に考えなくてはならない。聞こえにくいことを本人がどのように考えているか、受け入れているのかなどは、本人の性格や人生観に密接に関係してくる。人生に対して積極的な方は聞こえないことで困りなんとかしようとする。現状維持で十分、聞こえないことを他人には隠したい、あるいは生きていく上であまり楽しみがないなどという方は、多少聞こえなくてもあきらめてしまう。

この困り度が高ければ高いほど、障害を軽減しようとする意欲が高まり、補聴器を使いこなせる可能性も高くなる。筆者は本人が感じる困り度が一般的に補聴器適応を最も左右する要因であると考えている。

### ③ 聴力レベルと難聴の種類

教科書的には、両耳の平均聴力レベルが45dB程度以上の場合に補聴器の装用を考えるということになっている。

しかし、筆者は聴力レベルを重要視しないことにしている。なぜなら、70dB程度でも補聴器を使わずに済ませている人が少なからずいるという事実があるからである。そのような方が何人も相談の場に来所された。今さらわざわざほしいだけの補聴器を装用する必要はないと判断せざるを得ない人も少なくなかった。その人は補聴器がなくても現在の生活なら送れるのである。また、老人ホームなどに入所している人も同様に補聴器をあまり必要としない生活を送っていると考えられる。

なお、補聴器適応は難聴の種類がちがいではっきりと異なる。伝音難聴と混合難聴は比較的補聴器の装用効果が期待できる反面、感音難聴は装用効果が期待できないということは医学的常識である。老人性難聴は感音難聴の代表例である。

### ④ 日常生活環境

日常生活環境の中のすべての場面で補聴器が有効とはならない。たとえば、玄関のチャイムやテレビが聞こえないなどに対しては、他の福祉機器のほうが役に立つ。補聴器がもっとも有効なのは、静かな場所での少人数の会話であり、数人での会話、3m以上離れたところや後ろからの呼びかけに応えるのは相当困難といえる。テレビや電話ばかりでなく講演会や車内放送などスピーカーを通した音声も補聴器が不得意とするところである。したがって、本人が困っていることを日常生活の具体的な場面で補聴器が有効かどうかとい

う観点で検証する必要がある。

本人が会話を含めた環境音の中で何に価値を置く生活を送っているのか、支障をきたす会話や環境音をどの程度の重要さとして考えているのか。それは補聴器が得意とする場面なのか。この点は補聴器適応を予測する際、重要な要因となる。つまり、補聴器が不得意とする場面を主に改善したい場合は適応が難しくなる。筆者は試聴する前に補聴器に対して過度の期待をもたせないようにするために、あなたが困っている〇〇(たとえば食事)の場面では補聴器を装用してもよくわからないかもしれないという情報は必ず伝えることにしている。

### ⑤ 老人性難聴や補聴器に対する認識

高齢者の聞こえの相談にあたって、当人と家族ともに老人性難聴や補聴器について正しく理解していない人が圧倒的に多いと感じている。東京都心身障害者福祉センターの来所者を見ると<sup>6)</sup>、60歳以上の高齢者では7割以上の来所者に相談に当たった専門職員が老人性難聴の特徴について説明をし、2割程度の来所者に補聴器の説明をしている。

たとえば、

「老人性難聴の特徴は、小さめの音が少し聞こえにくくなっていますが、それよりも問題なのは言葉の聞き分けの力が低下していることです。つまり、音は聞こえるのに今聞こえてきた言葉が『ア』なのか『イ』なのかの区別が難しくなっているのです。また、スピードにもついていけなくなっていますので、早口は聞き取れません。」

と説明すると、初めて合点がいったという人は珍しくない。つまり、多くの人は老人性難聴者には大声で話せばいいと思っている。

また、

「メガネはかければ文字がはっきり見えますが、補聴器はメガネとちがって、若かったころと同じようにはっきり聞こえるようにはなりません。」

と説明すると、補聴器をすでに使っている人でもそんなことは今まで聞いたことがないと驚き、現状を納得するようになる。

あるいは、

「補聴器を使ったことがある友達に聞いたら、あんなものは雑音がうるさいだけと言っていた。補聴器は何も役に立たないんですよ。」

とまっさきに言われることも少なくない。

ここで補聴器についての認識をまとめると、次に示すような二極分化の傾向がある。



認識1:補聴器は聴覚障害を完全に克服できる器械である。

認識2:補聴器はうるさいだけで何も役に立たない。

認識1と認識2の中間的な考え方をする人は少なく、多くの方が認識1のような補聴器全能説か認識2のような補聴器無能説である。いかに、正しい情報が伝わっていないかがよく分かる。このように老人性難聴や補聴器に対する一般ユーザーの認識が相当に歪曲されている。<sup>6)</sup>

補聴器全能説の方には過度の期待をもたせないように補聴器の限界を力説する。一方、補聴器無能説の方には適応の可能性が高ければ積極的に試聴を勧めるなど、補聴器適応を考える際に対応が異なってくる。いずれにしても特に補聴器の試聴をする前には誤解を解いておく必要がある。誤解をもったままであると補聴器を通した聞こえという新しい状況を受け入れにくくするからである。つまり、本人が補聴器をどのように考えるかは、補聴器適合を考える際必ず考慮すべき要因である。

また、補聴器をしていると年寄りに見られるなど感情的に拒否を示す人もいる。補聴器を装着してみようとする意欲に関わる問題であるから、十分に注意する必要がある。

#### ⑥ 補聴器の装用経験

補聴器が初めての方には時間をかけて対応する。補聴器に対してどちらのタイプの認識をもっているかにもよるが、いずれにしても試聴の段階では本人の納得いくまで試聴させることが必要である。限界は限界として理解してもらわなければならないが、今後のことも考え新たな誤解をもたせてはいけない。

過去に補聴器の装用経験があり、現在は使っていない人も多い。それは使った補聴器が役に立たなかった証拠である。したがって、補聴器に対してよいイメージをもってなく、補聴器無能説に近い。このことを前提に補聴器適応を再度考えるべきである。補聴器を装用することで感じるメリットがデメリットを大きく上回るくらいでなければ適応は難しい。

#### ⑦ 経済状況

補聴器はどんなに安くても4万円程度はかかる。最近は30万円を越えるものもある。そしてその耐用年数が4年から5年程度ということになれば、多くの人にとって気軽に買える器械ではない。高い補聴器が必ずしも高性能とは限らないというものの、各自の聞こえの特性に合わせて適する補聴器は限られてきて

10万円を越える補聴器を選ばざるを得ないことも多い。

本人が補聴器に対していくらなら払えるのか、払う気持ちがあるのかは最終段階では重要な要因と考えざるを得ない。

もし、身体障害者手帳に該当するレベルなら、実質補聴器を購入するに当たり補助が受けられる可能性が高いので、経済的負担はずいぶんちがってくる。したがって、手帳の取得は必ず念頭に置くべきである。

#### ⑧ 試聴後の自己評価

補聴器を実際に装用する前の段階で、適応の可能性が高いといっても試聴もせず購入を決めるべきではない。実際に補聴器を通した音声は聞いてみなければ判断しようがないし、補聴器は万能でもないし、デメリットも感じるはずである。また、本人の聞こえの状態に合った補聴器とその調整を決めるのも簡単にはいかない。

試聴した結果、補聴器を装用する方がしないよりも支障が少ないと実感できるまで購入すべきではない。筆者は試聴後の自己評価も適応を左右する最も重要な要因のひとつと考えている。

ただし、最近はカナル型補聴器のように各自の外耳道に合わせて補聴器の外形を作ってしまうタイプが増えており、購入することが前提でない試聴もできない場合が多くなっている。この場合は、試聴が簡単な箱型や耳掛型で補聴器を通した音声を試してみるくらいはしたほうがよい。

### 2) 他人側(特に家族などの同居人あるいは介護などのサービスを供給する人)の要因

#### ① 聞こえないことでどの程度困っているか(困り度)

他人は本人の自覚がない場合でも、本人のコミュニケーション障害には気づきやすい。「話を通じず、イライラする」、「トンチンカンな答えが返ってくる」など、本人はあまり気にしてなくても他人のほうが困っているのが一般的な家庭の状況である。

本人と他人で困り度の認識に差がある場合、たとえば本人があまり補聴器を使いたくなく、他人のほうがとても困っているときなどは、だれかと話をするときだけ補聴器をつけるというのも現実的な対策のひとつである。この場合、補聴器を使えば話をするとき大声を出さずに済むので、主に他人のほうが恩恵を被ることになる。特に本人が介護を必要とする場合に保健婦さんなどの介護者にこのような方法を勧めている。

他人の困り度も独りだけでは生活できない現状を考えると、補聴器適合を左右する要因として軽視できない。

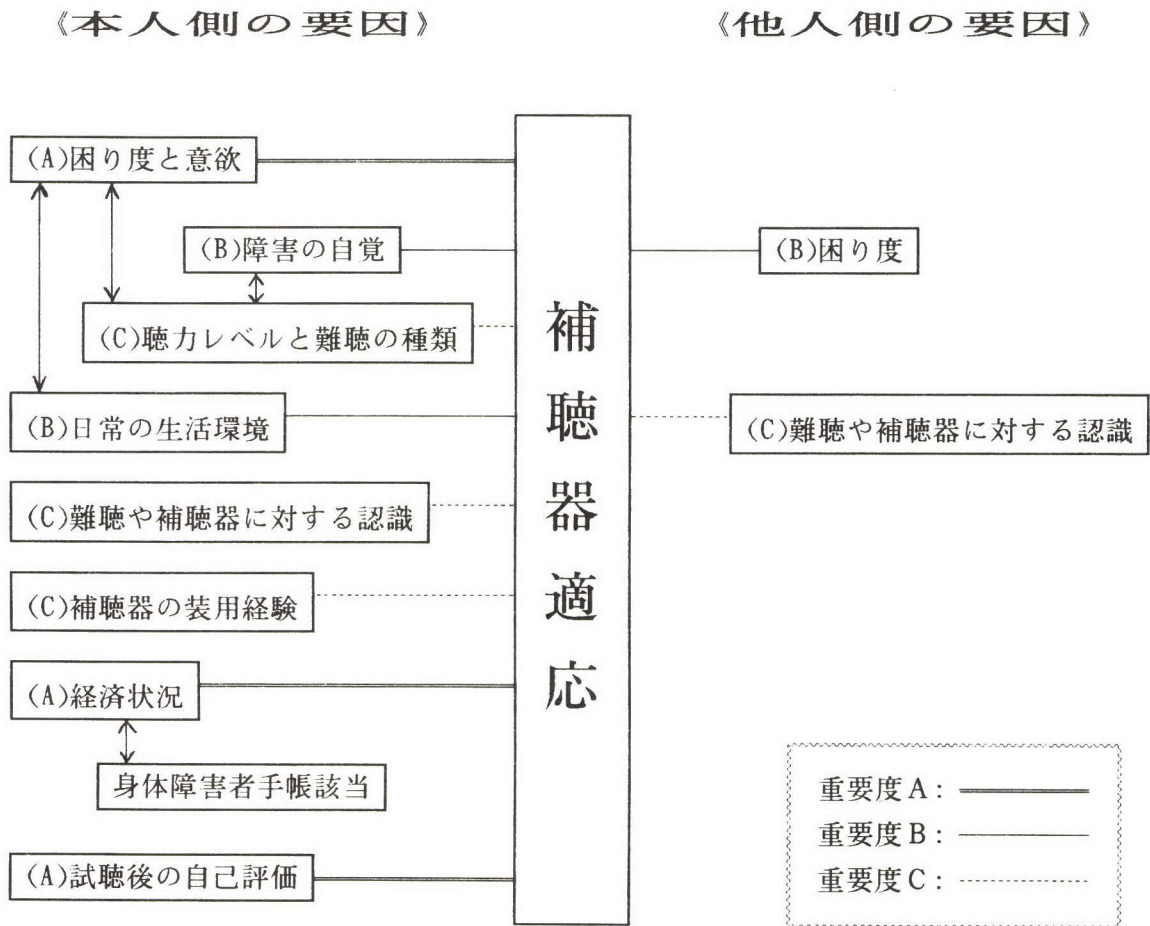
② 老人性難聴や補聴器に対する認識

補聴器を装用している人に話しかける人は、老人性難聴や補聴器に対して正しく認識しているほうがよい。早口でしゃべったり、3m以上離れたところから話しかけても、本人に補聴器の装用効果を感じさせることができにくい。補聴器を装用しているといっても、話

しかける側は普通の大きさの声で話すことができるくらいのメリットしかないと覚悟するべきで、2m程度までの距離で正対し、ゆっくり、はっきり、区切って話すことが要求される。

補聴器が役に立つためには他人の理解と協力が欠かせないのである。

図1 補聴器適応を左右する要因とその重要度



適応を見極めるときの重要度をA、B、Cの3段階(Aが最重要)で示している。

↔ は相互に妥当性や重要さを検討する必要があることを示す。



#### 4. 補聴器適応の見極め方法

3で適応を左右する要因について論じてきたが、実際の適応の見極めに当たってはすべての要因について、それぞれの重要度を考慮しながら総合的にかつ個別的に判断しなくてはならない。図1に要因とその重要度の一般的な考え方を示した。それぞれの重要度は重要なものから順にA、B、Cの3段階で表している。補聴器の適応を見極める際に最も重要であると考えられる要因（Aランク）は、「本人が聞こえないことでどの程度困っているか（困り度）とそれを改善しようとする意欲」、「経済状況」、「試聴後の自己評価」の以上3項目である。

補聴器には「装用にもなう煩わしさ、体裁の悪さ、維持に関する手間」<sup>5)</sup>がかかるとばかりでなく、器械を通した慣れない音を聞かざるを得ないという本質的な高いハードルがある。補聴器を使いこなすようになるためにはこのような高いハードルがあると一般的に認識されていないことが大きな問題である。この高いハードルを越えるためには、多少の困難を克服するような強い意志が必要とされる。本人が日常生活上いろいろな場面で聞こえなくて困っていて、それらを改善しようとする意欲が高ければ、高いハードルを越えるための準備が整っていると考えられるのである。

しかし、いくら意欲が高くても、補聴器が購入できない経済状況であれば断念せざるを得ない。身体障害者手帳に該当していれば、廉価で補聴器が購入できるようになる可能性が高いので、経済状況が問題となる場合は積極的に手帳取得を考えるべきである。

実際に試聴してみて、補聴器が何万円かのお金を支払うに値するものであったと納得できたかどうかで最終的な判断を下す。補聴器の耐用年数は一般的に4年から5年であり、家庭電器製品よりもっと早く買い替えをせざるを得ない器械であることも同時に考慮する必要がある。

次に重要と考える要因（Bランク）は、「コミュニケーション障害の自覚」、「日常生活環境」、「他人が聞こえないことでどの程度困っているか」の以上3項目である。

本人の自覚が少しでもあれば、補聴器を装用することへの抵抗感は軽減される。また、日常生活を考えたとき補聴器が役に立ちそうな場面で困っているほうが、補聴器の有効さを感じやすい。

補聴器を装用してもそれほどはっきりと聞こえてこない以上、本人の努力だけでは相当に限界がある。本人に話しかける人は補聴器は大声を出さなくて済むだけの器械であると理解すべきである。そして、本人に話しかけるときは「ゆっくり、はっきり、区切って」を心掛けることは最低限のマナーであり、遠くからや後ろからは話

しかけないことなども守ってもらわねばならない。補聴器をしてもぜんぜん話が通じないと不満をもらす家族の方がいるが、そのあたりの事情を家族も理解する必要がある。困っていれば障害の理解や協力が比較的得られやすいからである。

最後に、教科書的な考えと異なり、筆者は聴力レベルをそれほど重要視しないことにしているのでここで再度説明を加えておく。平均聴力レベルが70dB程度でも補聴器を装用しなくてもなんとか生活できるという事実から考えて、筆者は気導聴力検査の結果は本人や他人の訴えを裏付けるデータとして扱う程度でよいと考える。気導聴力検査の検査を金科玉条のごとく信じ、45dB以上なら即補聴器の装用を勧められるという実態を改める必要がある。

#### 5. 適応の可能性が低い典型的な事例

図1に示すような種々の個人的要因をあまり考慮する必要がなく、かつ適応の可能性が低い場合は、以下に示すように条件が特定できるため特に説明を加えることにする。

##### 1) 施設入所中の場合

施設内の生活を考えると、補聴器を新たに購入して使い始める必要がある場面や状況はほとんどありえないと考えざるを得ない。耳のそばで大声で話せば伝わるようなら支障がないのが施設内の一般的な生活である。

すでに補聴器を持っていても使っていない人も多く、その場合は十分な装用指導の下、職員との会話などの場面だけでも使うようにするとずいぶんコミュニケーションが楽になるにちがいない。

##### 2) 在宅で一人暮らしの場合

在宅の一人暮らしの方が困る場面や状況としてよく挙げられるのは次の3つである。

- 玄関のチャイムが聞こえなくて客の来訪がわからない。
- 電話関係。呼び出し音がわからない。相手の話が分からない。
- テレビを見ていて、何を言っているのか分からない。

これらはすべて補聴器が不得意とするものであることから、補聴器を積極的に勧められない。補聴器以外のそれぞれに機能が特化した福祉機器のほうが役に立つ場合が多い。たとえば、玄関のチャイムなら点滅信号にする。電話ならFAXにしたり、受話器の音量が大きくなるタイプの電話に替える。

## 6. おわりに

高齢化社会の到来が最近よく話題になっている。70歳代以上の高齢者なら、老人性難聴に起因するコミュニケーション障害は程度の差こそあれ例外なくだれにもおそってくる。社会生活を送るに当たってはコミュニケーション能力は欠かせない能力であるが、それに支障をきたす主因のひとつが老人性難聴である。耳が遠くなったら補聴器しか頭に浮かばず、それを敬老の日のプレゼントとして贈って何も疑問に思わないという一般認識。補聴器の性能の進歩が著しい反面、特に高齢者の補聴器をめぐる環境（補聴器に対する認識や補聴器を活用している人の少なさ）は何も変わっていないように感じる。

耳が遠くなったら、例外なく耳鼻科の診察を受ける。そのときに老人性難聴や補聴器について十分な説明がなされているとは言いがたい。聴力レベルだけで補聴器の適応が判断され、医師から気軽に装用を勧められ、補聴器店（ディーラー）を紹介される。補聴器店では購入を前提に適応が検討され、結局タンスや机の奥にしまわれる補聴器を購入してしまうはめになる。これが何年も前から現在まで変わることなく繰り返されてきた典型的なパターンである。

高齢者が最初に話を聞く耳鼻科医の補聴器に対する認識が変わらなければこの状況はなかなか変わらないかもしれない。ディーラーでは商売が前提であり、購入を前提にしないわけにはいかないであろうから、ディーラーとは別の中立の立場で補聴器の適合について相談できる場が必要となるであろう。<sup>7)</sup> 現在そのような場がほとんどないといえる状況であり、これが最大の問題であると考えられる。

## 7. まとめ

- 1) 高齢難聴者の補聴器適応を左右する要因のうち、最重要(Aランク)と考える要因は、「本人が聞こえないことでどの程度困っているか(困り度)とそれを改善しようとする意欲」、「経済状況」、「試聴後の自己評価」である。
- 2) Bランクと考える要因は、「コミュニケーション障害の自覚」、「日常の生活環境」、「他人が聞こえないことでどの程度困っているか」である。
- 3) 適応の見極めに当たっては、適応を左右するすべての要因について、それぞれの重要度を考慮しながら総合的にかつ個別的に判断する。

## 〈引用および参考文献〉

- 1) 小寺一興「補聴器装用のための検査」『聴覚検査の実際』日本聴覚医学会編 南山堂 1999. p149
- 2) 八木昌人、他「高齢者の聴力の実態について」日耳鼻 vol.99 1996. pp869-874
- 3) 柳田則之、他「一般高齢者75歳以上の純音聴力」Audiology Japan vol.39 1996. pp722-727
- 4) 榎村裕美「高齢者の聴力の実態」Audiology Japan vol.40 1997. pp713-718
- 5) 中村賢二「補聴器の適応」『補聴器装用マニュアル』大和田健次郎編 医学書院 1984. pp29-41
- 6) 吉川雅博、金谷彰子「東京都心身障害者福祉センター来所者にみる補聴器に対する誤解」日本音響学会聴覚研究会資料 H-99-11 1999.
- 7) 吉川雅博「補聴器ユーザーと販売店の中間の立場から」いくお〜 No.29 1998. p13



Adaptation in the Hearing-impaired Elderly:  
Reconsidering the Criteria for the Use of Hearing Aids

YOSHIKAWA Masahiro

This paper suggests that new factors should be considered for the hearing-impaired elderly in deciding their use of hearing aids. Adaptation, which implies a person's adaptability to the hearing aid, has been discussed solely from the aspect of his hearing capability, i.e. hearing level. Generally, the hearing-impaired in the aged population are supposed to wear hearing aids if their hearing level is over 45dBHL. Strictly this criteria applied, people over the age of 80 are almost all required to use the hearing aid. The fact is that quite a few elder people do without a hearing aid even if they have one at home. I know some elderly people who are not using hearing aids even though their hearing levels are over 70dBHL.

I propose here that the decision of whether elderly people use the hearing aid or not should not be made based on the level of hearing but on some other factors such as a person's degree of suffering from hard of hearing, his economic conditions, and the degree of satisfaction, say after a period of trial. These personal and intentional factors are discussed in detail from the perspective of adaptation to the use of hearing aids.